ぎふこくご 号外

岐阜県小中学校教育研究会中学校国語科研究部会
発行平成三十年七月三十日

目次

一　巻頭言　「これからもオール岐阜」　会長　安田 英士
二　「全国大会の成果を広げ、深める飛騨大会へ」　主務　塚本 陽治
三　「全国大会の成果を『広げ』『深める』とは？」　研究総括　伊藤 雅樹
付録　平成三十年度 岐阜県中学校国語科研究会 全体研究構想図

中国研

岐阜県中国研
会長 安田英士
2018年5月15日(火)
No.1

生きてはたらく言語能力の育成

平成30年度の岐阜県中学校国語科研究部会は、全国大会の財産"オール岐阜"を引き継ぎ『生きてはたらく言語能力の育成』を研究主題に掲げ、4年後の飛騨大会に向かってスタートします。

これからもチャレンジ!

多くの人の入れ替わり

平成30年度、全国大会後の中国研がスタートしました。

全国大会までの役員は26名、本年度は23名に縮小し、新たに4年後の飛騨大会を見据えて飛騨大会準備委員長を新設しました。また、23人の役員のうち10名が新たに就任するという大変革の年となりました。これまで、中国研を支えてくださった伊藤会長が退任され、今井主務、西門研究総括、長谷川総務部長が新たな職場へ異動となりました。

この大きな人の入れ替わりに戸惑うのではなく、大きなチャンスととらえ、これまで培ってきた中国研の財産を踏襲し、新たな風を吹き込みながら岐阜県の国語科教育を支えていきましょう。

自分を磨く秘訣

皆さんには(何を昔話を…)と感じられることでしょうが、中国研にかかわってきた三十余年を振り返ってみたいと思います。

私は平成の初めから10年間、附属中学校で勤務しており、この頃が一番授業を考えていた時期だと思います。どんな方法で子どもたちの考えや思いを引き出していこうか、どんな声掛けで子どもたちを振り向かせようか…と。

岐阜市内の実習校の研究発表会に出向いては年齢の近い国語科教師の授業を(自分ならこうする)という思いで、ライバル心を燃やしながら観ていました。加納中には伊藤勝彦先生や樋田東洋先生が、長良中には片桐一男先生や長村貴先生が、青山中には古田秀人先生が、陽南中には小川和彦先生や西田拓郎先生が、東長良中には村山邦博先生が…。

一校で10年も勤めることができた時代ですから、自分の研究に没頭できたのだと思います。この10年間は自分を磨いた時代だと思います。

オール岐阜を

その後、主務を任せられました。ちょうど、「評価規準」という怪物が現れた頃で、「基準」と「規準」はどこが違うのかの議論から始まり、実際の授業ではどう位置付ければよいのかが焦点となりました。

次年度からの実施が迫っており、自分なりの「評価規準」を構築したいと考え、全国の研究会に出向きました。あれこれ悩みながら、なんとか3年生の全教材・全時間の評価規準を考えて冊子にまとめました。まだ、世にこういう類いのものが出回っておらず、参考にできるものがなく、とても苦労しました。

それを持って暮れの役員会に出席し、会長や副会長の先生方に見せました。会長や副会長は県を代表する国語科の校長先生方で何を言われるかとても不安でしたが…。そこで言われたのが「全学年あると先生方は助かるな」というものでした。これは、全学年を作りなさいという暗黙の指示であると受け止め、2月の代議員会までに1年生と2年生の評価規準を完成させる決意をしました。

毎日、部活動を終えてからその作業に取り掛かり、何とか完成にこぎつけ、ページ数は百を超えていたと思います。それを代議員会で配布し、中国研のホームページにも掲載し、誰でも活用できるようにしました。

中国研のメンバーとして、自分磨きだけでなく、共有できるものはみんなでシェアしていく、中国研から県下の国語科部員に発信していくという意識が私にも出た頃です。

少しの間、現場を離れ、戻ってくると、中国研で新しい国語科の力を育てていこうという「明日の授業を考える会(若手の会)」というのができており、とてもうれしく思いました。全国大会では、伊藤会長の"オール岐阜"という熱い思いで突き進み、岐阜県全ての国語科教師の力量アップがなされました。その熱い思いは、本年度の塚本主務や伊藤研究総括にも受け継がれています。塚本主務は、授業づくりで困ったことがあったら「中国研に相談を」という体制をつくり、より"オール岐阜"の強化に努めようとしています。伊藤研究総括は「楽しくて・力が付いて・またやりたい」と思える国語の授業を提供していくカリキュラム・マネジメントに注目し、先生方の参考になる黒板写真をホームページに載せていこうと計画しています。岐阜の国語の良さをみんなでシェアしていくという試みで、これも"オール岐阜"の精神がうかがえます。

研究主題は

5月1日の役員会で伊藤研究総括から本年度の研究主題の提案がありました。全国大会の成果や学習指導要領改訂の趣旨を鑑みて、「社会生活」に焦点化してみればどうかというものでした。それを受けて各研究部会長も研究構想を練ってきたわけで、統率のとれた研究部会の姿が分かりました。また、伊藤研究総括の新たな中国研のためにというやる気もうかがえるものでした。

平成5年の全国大会研究主題『明日に生きる言語能力の育成～主体的に取り組む国語科授業を通して～』は、25年経った今でも求めていきたいものだと感じます。昨年度の全国大会の準備委員会で、まず頭を悩ませたのが、これまで続いてきたこの研究主題を踏襲するか、新たなものに変えるのかということでした。学習指導要領を読み込み、何が求められているのかを考え直し、何人もで長い時間をかけて考えたのが『生きてはたらく言語能力の育成～言語能力の高まりを実感する言語活動の充実を通して～』でした。

この研究主題について全国大会の講話の中で杉本調査官は、「国語科は言葉の力を付ける教科、つまり言語能力を育成する教科であるということ。このことはもちろん今までもそうですが、今回改めてご確認いただきたいということです。そして、言語能力の高まりを実感するということ。つまり、子どもが、今、授業では言葉の学習をしているんだ、自分にはこういう言葉の力、言語能力がついたんだと自覚する、実感する。それは、言語活動を通して実感するということです。ですので、今大会の研究主題は、これからの国語科の授業の方向性と合致するということです。」と述べられました。

伊藤研究総括の新しい風をという思いも大切にしつつ、文科省から評価されたこの研究主題をしばらく続け、徐々に新しい風を吹かせていこうと思っています。

2017.10.26～27

46th 岐阜 中学・国語

全日本中学校国語教育研究協議会

【ポツになった全国大会のロゴ】

〈過去10年間の全国大会"研究主題"H19～H28〉

H19 宮城	確かなことばの力が身につく学びがいのもてる授業の創造
H20 埼玉	生きてはたらく国語の力の定着を図る授業の創造
H21 東京	豊かな言語活動の基盤を築く国語科教育
H22 神奈川	「生きる力」をはぐくむ言語能力の育成
H23 群馬	社会生活に生きる言語能力を高め合う国語科授業
H24 熊本	豊かに言語生活をいとなむ学習者の育成
H25 北海道	自ら言語活動にかかわり学び合うことで、実生活に生きる言葉の力を獲得する授業の創造
H26 千葉	確かな学力の育成～中学校国語科の授業づくり～
H27 愛媛	生きてはたらく言葉の力を育む授業の創造
H28 鳥取	生きてはたらく確かな言葉の力を育てる国語教育の創造

編集後記

手書きの新聞は校長になってから毎月発行し、3年前に全国コンクールで最優秀賞をもらいまして、ずっと趣味で書いています。ですから、楽しみながら、この紙面を埋めているわけです。忙しい中ですが「楽しみながら仕事をする」「自分らしさを大切にする」ことにこだわって、残り3年弱の教師生活を送りたいと思っています。

さて、今回の学習指導要領改訂にかかわるポイントは「ぎょうこくご No.68全国大会収録」の杉本調査官の講話を読んでいただければいいかと思います。

ですから、夏の研修会などではより多くの実践を広めていきたいと思います。まずは、好評を博した全国大会での研究授業や実践を、全ての先生方が共有できるような場を設定したいと考えています。

全国大会の成果を広げ、深める飛騨大会へ

中学校国語科研究部会　主務　塚本　陽治

一　運営方針に関して

平成二十九年十月二十六日、二十七日に開かれた第四十六回全日本中学校国語教育研究協議会 岐阜大会は、県内の多くの先生方のご協力もあって、盛会の中、幕を降ろしました。岐阜県の中学校の国語の授業の在り方を全国に示すことができました。それは、伊藤前会長先生が掲げられた、

・「主体的・対話的で深い学び」の授業作り
・オール岐阜で臨む

が実現できたからではないでしょうか。研究部が一丸となって取り組んだ授業づくりも、全県下の国語科の先生方の総力を結集して、滞りなく運営できたことも、何よりの成果であると実感しています。ありがとうございました。

しかし、全国大会でこれまでの中国研の歩みが終わるわけではありません。この大会の成果を生かし、平成三十三年度の飛騨大会に向けて、新たな研究を進めていかなくてはなりません。また、新学習指導要領全面実施も控えており、国語界のみならず、学校教育界全体がターニングポイントを迎えていると言えます。県中国研がこれまでに積み上げてきた数々の実践、実績の中には、新たな国語の授業作りにつながるものがあると私は実感しています。だからこそ、年度末の代議員会でも提案されましたが、

「全国大会の成果を広げ、深める飛騨大会へ」

を合言葉に、研究の新たなスタートを切りたいと思います。

昨年度の全国大会は授業や実践のみならず、オール岐阜で臨んだことで、別の成果もありました。それは、研究部のメンバーも若手の先生方を中心に再編することができたことです。そして、この機会に中国研という組織が全県下の国語科の先生方にとって、「気軽でためになる」研究団体としての「在り方」も考えていきたいと思います。「学校に国語科の先生がいなくて…」「テストの相談がしたいけど…」といった悩みを抱えている先生方は各郡市に必ずいらっしゃると思います。

「そうだ！　中国研に聞いてみよう」
「中国研に相談してみたら？」

そんな声が聞こえてくる体制作りを進めていきたいと思います。「オール岐阜」のよさが最大限に発揮できるよう努めていきます。ご理解とご協力のほどよろしくお願いします。

二　研究内容に関して

（1）研究主題について

昨年度までの研究主題は、

生きてはたらく言語能力の育成
～言語能力の高まりを実感する言語活動の充実を通して～

でした。この研究主題のもと、研究部の先生方の実践や各郡市の教科研の実践をもとに、「生きてはたらく言語能力一覧表」や「言語活動一覧表」を作成し、全国に向けて発信することができました。これは、大きな財産となりました。

また、「言語活動の充実」や「言語能力の高まりを実感する」という言葉は、新学習指導要領における国語科の目標においても次のように示されています。

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

つまり、私たちが目指すべきは、「生徒に言語能力を身に付けさせる」ことであり、生徒がその高まりを実感している姿こそが、中国研が目指す生徒の姿であると考えます。また、「言語活動を通して」とあるように授業改善のために行う言語活動の創意工夫や充実は、私たちの研究の糸口になると考えます。

以上の点から、また、前述した「全国大会の成果を広げ、深める飛騨大会」に結ぶためにも、昨年度の研究主題を継続し、研究を進めていきたいと考えます。

また、学習指導要領の改訂にあたり、全国大会で発信した「生きてはたらく言語能力一覧表」や「言語活動一覧表」の改善も必要です。飛騨大会では、新学習指導要領に合った形の言語能力や知識及び技能、思考力・判断力・表現力等や言語活動などの関連を示す一覧表の作成を進めていきたいと思います。詳細は研究総括からの提案をご参照ください。

（2）研修会について

経験年数の少ない先生方や小学校から中学校へ校種を変更された先生方、小規模校で不安をおもちの先生方、明日の授業をどうしようか迷っている先生方などに参加していただき、日頃の授業に対する悩みや、魅力ある授業の構想の仕方など情報交換し合う研修会を行っています、夏季・冬季の年二回開催しておりますのでぜひご参加ください。

三人から五人ぐらいのグループをつくり、事前につかんでおいた話題をグループ全体で考えていく方式は大変有効にはたらいていると思います。普段、「こんなことを聞いていいのかな……」「今さら聞きづらいな……」と思うようなこともどんどん話せるので、参加者からも好評をいただいています。

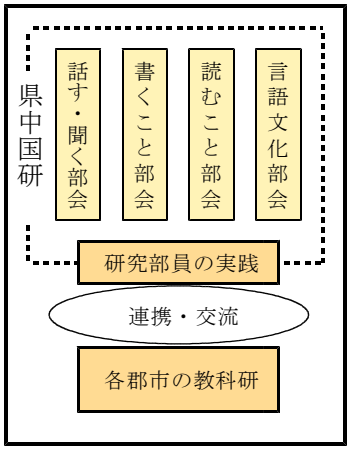
普段から教材を研究して授業には臨んでいますが、国語科部員で検討し合うと必ず新しい発見があります。話す側にとっても聞く側にとっても力が付くものだと思います。ぜひご参加ください。

三　研究体制について

昨年度は、全国大会での研究授業や実践発表を「オール岐阜」で行うために、「書くこと領域」と「読むこと領域」をそれぞれ二つの研究部に分けて活動してきました。昨年度末にも提案されましたが、今年度からは、飛騨大会に向けて、改めて「話すこと・聞くこと部会」「書くこと部会」「読むこと部会」「言語文化部会」の四つの研究部会に戻すことになりました。

また、昨年度の全国大会を「オール岐阜」で行ったことで、県内の多くの先生方に運営や研究に携わっていただきました。そして、その中から研究部員に新たなメンバーとして加わっていただき、再編しました。若い先生方や素晴らしい実践をお持ちの先生方の力を結集して研究を進めていくことになります。よろしくお願いします。

それに伴い、昨年度までは地区ごとに実践する領域を固定して取り組んできましたが、今年度はその制限も定めません。各郡市のニーズに合った授業実践をお願いします。県中国研としては、一つでも多くの実践をバックアップしていきたいと考えています。



「全国大会の成果を『広げ』『深める』とは？」

【平成三十年度　中国研　研究主題】

生きてはたらく言語能力の育成

～言語能力の高まりを実感する言語活動の充実を通して～

研究総括　伊藤　雄樹

はじめに

平成二十九年十月二十六・二十七日に行われた、文部科学省の杉本直美教科調査官をはじめ、県内外からお越し頂いた参観者の皆様に大絶賛を頂いた全国大会から、ちょうど二ヶ月後の十二月二十七日、岐阜市立境川中学校で、毎年中国研が主催している「明日（あした）の国語を考える会」が実施されました。そこで、私は忘れられないお言葉を聞きました。

> 私は、講師二年目で、本校から参加したもう一人の教員は、講師三年目で、中学校経験はお互い初めてです。国語科は私たち二人だけです。日々の授業はもとより、定期テストの際には、お互い作った問題がこれで良いのか検討することも難しいため、車で十五分かけて、近くの学校のベテランの先生にご指導を頂き、学校に戻って直し、また持って行ってを繰り返して、ようやく生徒に出すことができます。その日常に比べれば、こうやって、国語のことについて、勉強できる時間は本当に幸せです。
>
> （「明日の国語を考える会」にご参加頂いた女性講師の方のお言葉）

私は、この言葉をお聞きし、身の引き締まる思いが溢れてきました。

そして、このお言葉をお聞きしながら、同時に昨年七月に告示された「学習指導要領解説　総則編」に示されたある言葉が、脳裏に浮かびました。それは、**「カリキュラムマネジメント」**です。「学習指導要領解説　総則編」五ページに次のように述べられています。

> 教育活動の質を向上させ、学習の効果の最大化を図るカリキュラム・マネジメントに努めることが求められる。このため総則において、「生徒や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと（以下「カリキュラム・マネジメント」という）に努める」ことについて新たに示した。
>
> 岐阜県国語科研究会に置き換えたとき、私の私的な解釈を加えて考えると、
>
> **岐阜県中国研におけるカリキュラムマネジメントとは**
>
> **岐阜県の国語科研究会に在籍して下さっている三十六名の研究部員の方々という人的財産を駆使し、岐阜県全域の国語科教員が、明日の国語の授業で、「そうか！こんな授業のアイデアがあるのか！やってみたい！」と思えるアイデアを手軽に入手し、岐阜県全域に住む生徒全てが「楽しくて」「力が付いて」「またやりたい」と思う国語の授業を提供し続けることができるための仕組みづくり**
>
> **と考えました。**

この思いをもちながらも、具体的にどうするとよいか、途方にくれていた私ですが、情報部長　岸　浩道先生にご相談したところ、

> **岐阜県中国研のホームページをクリックすると**
> **「全学年・全領域の授業の黒板写真を閲覧できるもの」**

になればより手軽に、多くの先生方と学び合うことができるのではないかと教えて頂きました。

「どうしよう…明日の授業…。」

私自身もこんな悩みをもつことが日常茶飯事です。

そんな時、三十六名の研究部員の先生方のお力をお借りし、「いいな、この授業！やってみよう！」と思える、そんな中国研を目指していくことが、昨年度の全国大会の成果を**「広げ・深める」こと**の第一歩となるのではないかと考えております。

ぜひ、研究部員の先生方のお力をお借りし、「岐阜県中国研だからこそできるカリキュラムマネジメント」を実現し、岐阜県に住む、全ての生徒に「楽しくて」「力が付いて」「またやりたい」と思える国語の授業づくりにお力をお貸し頂ければと考えております。

私も精一杯取り組んで参ります。よろしくお願いいたします。

このような思いをもとに、次の三点を具体的な研究計画としてご提案差し上げます。

①　岐阜県中国研だからこそできる、岐阜県全域で行うことができる「カリキュラムマネジメント」

上記のような思いから、研究部員三十六名の先生方のお力をお借りし「例えばこの教材は、このように授業を展開してはどうか？」というものを、御自身が実践された授業の黒板写真をデジカメで撮影いただき、情報部に提供、その後、岐阜県中国研のホームページにアップすることで、岐阜県に住む、全ての生徒に「楽しくて」「力が付いて」「またやりたい」と思える国語の授業づくりを目指したいと考えております。

また、学習指導要領においては、その実践を経年で見直し、改良を加えていくことで、質の向上を目指していくことも記されています。

「変えなければならない」という思考ではなく、「昨年行った○○の教材を、ちょっとここだけ変更すると、生徒の反応が良かった」というものを累積・差し替えを行っていくことで、三年を目安として、全領域・全学年の黒板写真がホームページで閲覧可能となれば、きっと、私たち自身も様々な先生方のご実践から、学び合える仕組みづくりになるのではないかと考えております。

その時に私たちの研究の土台となるのが、昨年度完成・送付された**『「生きてはたらく言語活動・言語能力一覧表」』（別紙参照）**ではないかと考えます。これは、昨年度まで中国研に在籍してくださった研究部員の方々のご協力により作成された、中国研の宝ともいえるものです。

この一覧表は、学習指導要領の指導事項に照らし合わせた時、「具体的に、どのような言語活動を仕組むことが、生徒が学習に対して魅力や必然性を感じ、主体的に学ぶことができるか」を具体的な言語活動、作文・表現活動のテーマ集として作成されたものです。

この「生きてはたらく言語活動・言語能力一覧表」に記されたものを、

(1) 研究部員の先生方に実践して頂く
(2) 「やってみて、こう修正した方がよりよくなるのではないか」という部分を加筆修正して頂く
(3) 実際の黒板写真や、授業資料をご提供頂き、岐阜県下で共有化する

このような流れで、昨年度までの研究における財産を、**「広げ」「深める」**ことになるのではないかと考えております。ぜひ研究部の先生方のお力をお貸し頂ければと考えております。

② 四部会に再編された各部会の研究構想・研究内容・「生きてはたらく言語活動一覧表」の平成三十三年度完全実施学習指導要領を窓にした見直し

昨年度行われた全国大会では、現行の学習指導要領を窓として、各領域の研究構想・研究内容を練って実践してまいりました。三十三年度の飛騨大会では、昨年度告示された学習指導要領が完全実施になることを考えると、準備期間として、今ある研究構想・研究内容を、平成三十三年度完全実施の学習指導要領をフィルターとして見直すことが必要であると考えております。

大きく変更する部分はないとは思われますが、ご存知の通り、「主体的・対話的で深い学び」の具現は新学習指導要領の中で、無視することはできないキーワードであると考え、中国研の全体研究構想の中でも取り上げております。また、「書くⅠ（確かに書く）」「書くⅡ（豊かに書く）」を統合した「書くこと」部会、「読むⅠ（説明）」と「読むⅡ（文学）」を統合した「読むこと」部会では、二つの部会のエッセンスを取りまとめ新しい部会でどのような切り口で、研究していくかを研究部員の先生方にお知恵をお貸し頂ければと考えております。また、①で述べさせて頂きました「生きてはたらく言語活動・言語能力一覧表」も飛騨大会を目安にして、三年間で、平成三十三年度完全実施学習指導要領の指導事項と一致したものに作り変えていければと考えております。

③ 夏季ゼミナールにおける、昨年度の全国大会から学ぶ会及び、各領域の実践交流

平

毎年八月中旬に計画しております「夏季ゼミナール」ですが、昨年は全国大会に向けて、可茂・東濃・岐阜・西濃・美濃・飛騨の六地区で、全国大会の模擬授業を行ったり、実践提案のプレゼンを行ったりして各地区の先生方のご意見を頂き、研究を太らせる会として参りました。

そこで、本年度は、昨年度練りに練って実践していただいた全国大会の授業者の方から、全国大会の授業実践をまとめていただいたプレゼンをご披露いただき、前年度の実践から本年度の実践を考える一つの機会として参りたいと考えております。

具体的には、六つの授業　「話す・聞く」の篠田先生、「確かに書く」の梅田先生、「豊かに書く」の野々村先生、読むことⅠ（説明）の北原先生読むことⅡの（文学）の山田先生、言語文化の河合先生に、授業実践をまとめていただいたプレゼンテーションをご披露いただき、参加者の方自身の希望の授業のプレゼンテーションを見て頂きます。前年度所属部会と別の部会に所属して頂いている研究部員の先生もいらっしゃると考えますので、前年度までの研究について、共通理解・学びあいが行えればと考えております。その後各研究部から、部長から研究構想の提案・研究部員の実践紹介・質疑応答を行い、研究部の垣根をこえ、他の領域の研究部の研究についての共通理解を行い、本年度の研究をさらに推し進めて頂くような会にしていきたいと考えております。

【飛騨大会までの見通し】

平成３４年度実施の「飛騨地区大会」までの向こう４年間の研究に関わる見通し

年度	平成30年度	平成31年度	平成32年度	平成33年度 飛騨大会実施
行うこと	① 全体研究構想および、各部会の研究構想の見直し ② カリキュラムマネジメント（黒板写真のホームページアップ）１/３年度 ③ 夏季ゼミナールにおける全国大会授業者の実践提案及び、各部会の実践提案 ④ 「ぎふこくご」における１年間の研究の報告	① 飛騨大会の実施要綱の作成と検討 （準備委員長および、準備委員・研究副総括　日枝中学校　野島将也先生） ② 飛騨大会における授業者の決定と指導案の作成開始 ③ 飛騨大会における実践提案者の決定と実践提案の作成開始 ④ カリキュラムマネジメント（黒板写真のホームページアップ）２/３年度 ⑤ 「ぎふこくご」における１年間の研究の報告	① 飛騨大会の指導案検討 ② 飛騨大会における各部会のプレ授業 ③ 飛騨大会の実践提案の検討 ④ 第２回研究総会での研究部会で、実践提案および、指導案の検討 ⑤ カリキュラムマネジメント（黒板写真のホームページアップ）３/３年度 ⑥ 「生きてはたらく言語活動・言語能力一覧表の完成 ⑦ 「ぎふこくご」における１年間の研究の報告	① 飛騨大会の授業最終準備 ② 飛騨大会の実践提案最終準備 ③ 飛騨大会の運営 ④ カリキュラムマネジメント（黒板写真のホームページアップ）の更新 ⑤ 「ぎふこくご」における１年間の研究の報告（飛騨大会の報告）

平成３０年度　　岐阜県中学校国語科研究会　全体研究構想図

学習指導要領改訂において、学校現場に求められていること（学習指導要領解説　総則編より）

・社会構造や雇用環境は、予測が困難な時代となっている。一人一人が持続可能な社会の担い手として、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め、情報を再構築していくなどして、新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすること。
・生涯にわたって学び続けることができるようにするために、「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業改善を図ること。
・学校全体として、学習効果の最大化を図るカリキュラムマネジメントに努めること。

平成３３年度全面実施の学習指導要領　国語科の目標

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質･能力を次のとおり育成することを目指す。

⑴　社会生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。
⑵　社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。
⑶　言葉がもつ価値を認識するとともに、言語感覚を豊かにし、我が国の言語文化に関わり、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

岐阜県全体としての生徒の実態

・平成29年8月28日に公開された『岐阜県発表資料』によると、平成29年度の全国学力学習状況調査では、「国語Ａ・Ｂともに、本調査実施当初より全国の平均正答率を上回る数値で推移している。」と述べられており、知識・技能の定着状況や、知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や，様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力は概ね身に付いているといえる。
・全体としては、全国平均を上回ってはいるが、依然平均点の半分に満たない生徒は1割程度存在する。
・生徒質問紙「国語の勉強は好きだ」の質問に対して、「当てはまる」と答えた生徒は、21.4%、「国語の授業の内容はよく分かりますか」の質問に対して、「当てはまる」と答えた生徒は、27.1%である。
このことから、正答率の高さとは裏腹に、「国語が好きだ」・「国語は分かりやすい」と感じている生徒の割合や、成就感を感じている生

【願う生徒の意識と姿】

・国語の学習に対して、魅力や必然性を感じ、主体的に学習課題の解決に向かうことができる生徒
・５０分の授業の中で、確実に「生きてはたらく言語能力」に掲げた力を身に付けている生徒
・「確かに分かる・できる」「前よりよくなった」という実感をもち、次時への学習意欲を高めることができる生徒。

研究主題　　生きてはたらく言語能力の育成　　～言語能力の高まりを実感する言語活動の充実を通して～

〈仮説〉

①　学習指導要領の指導事項と照らし合わせ、「生きてはたらく言語能力」とは何かを明確にし、
②　「話したい・聞きたい」「書きたい」「読みたい」「知りたい」（＝楽しい）と生徒が願うような魅力的で、必然性のある教材開発を行い、
③　講義式のみでなく、生徒が主体的・対話的に学べる学習形態・学習方法・学習過程とは何かを見極め、適切に指導し、
④　全体指導以外にも「得意を伸ばす手立て」「苦手を克服するための手立て」を位置付けることで、全ての生徒に学びを確保し、
⑤　５０分の学習の中で、「確かに分かる・できる」・「前よりよくなった」という実感をもつことができる場を位置付け、次時の学習への意欲を高めることができれば　**【願う生徒の意識と姿】**に記述した生徒になるだ

〈研究内容〉

研究内容①　指導計画の工夫

⑴　**「生きてはたらく言語能力」の更なる明確化と、岐阜県全域におけるカリキュラムマネジメントの推進**

・昨年度完成、全学校に送付された「生きてはたらく言語活動・言語能力一覧表」を、平成３３年度全面実施の学習指導要領の指導事項と照らし合わせ、研究部員・研究部長が実際に実践する。そして、この一覧表の加筆修正を行うことで、昨年度までの財産をもとに、さらに精度を高める。
（県下に研究実践を広げるために、黒板写真・授業資料を中国研ホームページにアップし、共有できるようにする。）

⑵　**学ぶ魅力・必然性のある教材開発**

・「やりたい」「やらなければならない」といった、生徒の意欲を喚起するような教材開発・題材開発の工夫を行う。

研究内容②　指導・援助の工夫

⑴　**生徒が「主体的・対話的で深い学び」を獲得するための指導の工夫**

・「教師　対　生徒」の講義式の学習だけでなく、「生徒　対　生徒」等の「主体的・対話的な深い学び」になるために、どのような学習形態をとるとよいかを研究する。
・ただ単に「交流しましょう」では、互いに意見を言うだけの交流となり、考えに深まりはない。「最初は○と考えていたが、□ということが分かった」「最初は○と考えていたが、やっぱり○だと確信した。理由は…」「最初は○だと考えていたが、□もあると思った」などと、交流する前の自分と、交流した後の自分とに変容があることが必要。その為、交流するのにも、どのような交流の仕方をするのか、その方法を研究する。
・作文の授業を例に取ると、「○○という方法で書きましょう」と教え込むのではなく、たとえば、２種類の作文を提示し、「どちらの作文に説得力がある？そればなぜか？」と問いかけ、その理由を発見するような、「発見的な学習をするスタイル」を目指すために、どのような学習過程をとると良いのかを研究する。

⑵　**「どの子」にも「生きてはたらく言語能力」を身に付けるための手立ての工夫**

・全体指導だけでは評価規準に達することが難しいと考える生徒への「苦手を克服するための手立て」と、全体指導後、自力で評価規準に達するだろうと想定される生徒のための「得意を伸ばす手立て」を考えた授業づくりをする。

研究内容③　評価の工夫

生徒自身が５０分間での自己の高まりを実感することができる場の位置付け

・「確かに分かるようになった・できるようになった」・「前よりよくなった」という実感をもつことができる場を工夫し、次時への意欲を喚起する。そのことが、「国語が楽しい」「国語は分かりやすい」「国語をまたやりたい」という生徒の思いを生み出す。